

鉢をつくる

加藤文子

時々、鉢をつくってきた。

初めの頃は手がいうことをきかず、いびつで厚ぼったい茶わんのようなものばかりで、思い描いたようにはならなかった。

作陶の師である夫からは、「思ってた向かえば、その通りになってくれるはず」と、いつも言われる。不器用なこともあるのだろうが、一向にそんなふうにはならない。けれどまれに思いがけないものがつくれることもあるので、あきらめずにいる。

ここにきて、しばらくぶりに鉢をつくることにした。次に予定されている展覧会の内容を考えていたら、鉢をテーマにしたくなった。植物が喜んで暮らしてくれるような鉢が提案できたらいい。

鉢のほか、鉢に因んだ小さなブックレットも添えて、収める箱にもペイントして……プランはいろいろある。それにはまず、鉢をつくらなければ始まらない。余裕をもって植えられるようなほど



ほどの大きさ、直径十五センチくらいで作ってみようと思う。

展覧会は半年以上先なのだが、相応しいものがどれほど作れるかわからない、だから、とにかく始めなければ……。

春になったら外仕事が忙しくなるので、盆栽が冬眠している今を逃すわけにはいかない。

夫が主に使っているのは、磁器。長石が主成分なので、素地が緻密で硬質に焼き上がる。夫の制作においては、表現したいディテール、思った表情をうまく反映してくれるのは磁器なのだろう。

一方、陶土分の多い陶器は多孔質なことから根が呼吸しやすいので、前者よりも鉢に向いている。鉢は植物の生命を委ねる生長のベースであるという認識を大切にしたい。

粘土のかたまりをほぐしながら、この中で植物が根をおろし生きていく、そんなイメージを抱いてくぼみを広げていく。

深すぎず浅すぎず、適度なスペースをつくり出す。灌水した水が溜まらないように底に穴をあけ、さらには水がスムーズに排出されるように安定を考えて足を付ける。

いつもはじめしているのも根が冷えて健康をそこねるので、水のきれも大切。

これら一定の条件を満たした上で、それぞれの植物の個性が引き立つようにデザインして完成させる。

周囲にイボイボを散りばめたり、足を湾曲させてみたり、思いつきを加えてみる。楽しい雰囲気、

シャレた感じに仕上がってくれればうれしい。盆栽の居る風景がゆたかなものであってほしい。



デンドロビウム 盆養15年 元気そうで…キレイで…